

響 ～あなたから世界へ・あなたから未来へ～

所属	愛知県蟹江町立新蟹江小学校	実践者	村田 義剛
対象	小学校6年生(69名)	時間数	30時間
場所	教室 体育館 家庭科室	実践教科	総合的な学習の時間
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の国々への興味・関心を持ち、多様性や共通性を楽しみながら学ぶことができる。 ・世界で起きている課題に気付き、世界のために‘自分にできること’を考え、行動に移すことの大切さに気付くことができる 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1 -11	<p>【見て・聞いて・触れて。多くの国々と出会おう！】</p> <p>① ワークショップ版「世界がもし69人の村だったら」 1 アイスブレイキング 2 世界の人口比率を大陸に分けて見てみよう 3 世界の識字率ってどれくらい？ 4 貧困って何？</p> <p>② 教師海外研修経験をお持ちの先生方による出前授業(ガーナ・ラオス) 世界の食文化・生活様式の違い・各国で起きている課題を考える。</p> <p>③ JICA 中部・リトルワールドへの分散学習 ・JICA 中部では、協力隊として活躍された講師の方のお話を聞き、世界の国々への知識を深め、ワークショップで学びを共有。 ・リトルワールドでは各国の建物・食に触れ、学んだことをはがき新聞にまとめて共有。</p>	※3-11 時限目②③の授業実践の詳細は割愛
	12 -15	<p>【先生、パラグアイへ行く！】</p> <p>その前に・・・パラグアイってどこ？パラグアイって何？を解決するため、</p> <p>① 10年前にパラグアイで協力隊として働いていた先生による出前授業 お茶を回し飲み？結構田舎・・・衣装かわいい！ご飯美味しいのかなあ？</p> <p>② パラグアイと日本が繋がれるものを作ろう！ 1日本の新聞・広告・折り紙でしおりづくり 2メッセージボードづくり</p>	
	16 -17	<p>【先生、パラグアイから帰ってきた！】</p> <p>① パラグアイで先生、こんなこと見てきました！ 1 先生が見てきたパラグアイ(クイズ) 2 この写真の物語を想像しよう(フォトランゲージ) 3 パラグアイ国内の格差ってどうして生まれるの？ 4 格差のない社会を作るために必要な力</p>	
	18 -23	<p>【貿易ゲームをしよう！世界で一番遠い距離って??】</p> <p>① 貿易ゲームをして、世界経済のお金の回りを体感する。 世界の経済活動を体感→格差が生まれてしまう・・・。 1 格差のない社会を作る方法を考えたのに・・・その思いを邪魔したもって何だろう？ 2 考えることはできるけど、行動に移すことは難しい[世界で一番遠い距離] ② パラグアイが発展し始めているのはなぜだろう？ 他国で、誰かのために活動をしている人・してきた人を紹介する。(現地で撮影したDVD) ③ 今自分たちが学ぶべきこと・必要な力はなにかを考えよう(KJ法)</p>	
24 -30	<p>【パラグアイ愛 project】</p> <p>① パラグアイで活躍されている協力隊の方々を応援しよう！ 応援DVD作成 メッセージボード作成 パンフレット・ポスターで学びを紹介</p>		
成果	年度当初に総合的な学習の時間の年間計画を綿密に詰めることができたので、子どもたちが多くの国と出会う体験をする機会を設けることができた。「世界をよりよくしたい」というきれいごとだけで終わるのではなく、小学生の自分に今何ができるのかを考える機会を与えられたことで、子どもが世界に対してより主体的な関わりをすることにつながられたと思う。		
課題	こちらが提示した国は出会わせることはできたが、子供が一人一つの国を決め、自身でその国について調べられるような経験を取り入れることができれば、より主体的に世界の国々と出会えたと思う。		
備考			

[授業実践の詳細]

1-2 時限目「見て・聞いて・触れて。多くの国々と出会おう！①（世界がもし69人の村だったら）」

この時限のねらい

- ・世界の国々について、おおまかなイメージをつけ、今後の活動への意欲を高める。

1 子どもの活動の流れ

- ① ワークショップ版「世界がもし69人の村だったら」
 - ・「世界がもし100人の村だったら」のワークショップ資料を用いて、大陸ごとの人数比・男女比・識字率・貧困とほどのようなもので、どのくらいの人が飢えを感じているのかを体感する。



<100人村 大陸ごとに分かれよう>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「100人村」のワークショップでは、ランダムに配られたカードを見て指示があれば子ども自ら動くというアクティビティであったため、子どもたちは意欲的に取り組んでいた。
- ◇ 言語がわからない国のカードをもっている子は指示どおりに動けず複雑な表情をしていた。
- ◇ 地域ごとの人口分布図では、「アジアはパンパンだよ〜！」という声や「ユーラシア大陸って広い！」というような声があがり、子どもが世界へのイメージを体感できるきっかけとなった。



<アジアは人がいっぱいだよ〜>

3 使用した教材

- <教材1> 『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』第4版／DEAR 開発教育協会 2014

12-15 時限目「先生、パラグアイへ行く！」

この時限のねらい

- ・パラグアイの子どもたちとつながれる方法を考え、世界を身近に感じられる。

1 子どもの活動の流れ

- ① パラグアイと日本が繋がれるものを考えよう！
 - ・先生が夏にパラグアイに研修に行く際、現地の子どもたちと繋がる方法は何かを考える。「かさばらないもの・・・しおりはどう？」「日本の新聞とか広告はおもしろいんじゃない？」「和紙とかもいいかもしれないね！」「メッセージカードを作りたい！」「学校の紹介をしようよ！」
- ② パラグアイと日本が繋がれるものを作ろう！
 - ・スペイン語はインターネットや語学相談員の先生に聞いて調べる。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ パラグアイの子どもたちへのプレゼントを作る際は「外国の人から見て何がうれしいのかなあ？」と子どもたち同士で考え、「相撲の切り抜きとか、スーパーのチラシとかおもしろそう！お寿司の写真とか！」など、日本のイメージを客観視して考えられる機会となった。
- ◇ 実際に自分たちが作ったものがパラグアイの子どもたちに届けられるという、なかなか経験できないような体験をさせることができてよかった。
- ◇ 学校のトイレ・給食など、子どもたちにとっての「あたりまえ」を写真に収めたいと提案してきた際は、「世界の国々には多様性がある」ということを理解できるようになってきたのではと感じた。
- ◇ スペイン語は英語と全く違うことに気づいたり、「！」を付ける際は文字の始めに「i」のような記号を付けるなど、新たな発見に多く出会えた。
- ◇ パラグアイという国に愛着がわいてきたようで、パラグアイで事件が起きたことがニュースで流れた翌日には「先生大丈夫ですか？」など、パラグアイを身近に捉えてくれる児童が増えた。



＜スペイン語でメッセージ！＞



＜スペイン語で日本の学校を紹介しよう！＞

16-17 時限「先生、パラグアイから帰ってきた！（パラグアイでこんなことみてきました！）」

この時限のねらい

- ・パラグアイという国と肯定的に出会う。
- ・パラグアイを身近に感じ、楽しみながら多様性や共通性に気づくことができる

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレーキング

- ・自分が行きたい国はどこ？その理由も含めて30秒で伝え合おう！

※約束事 →相手の目を見て話す・聞くこと！話を聞くときはうなずくこと！話が終わったら拍手！

② さて、これはパラグアイのどんな場面？物語を想像しよう！【フォトランゲージ】

- ・パラグアイで撮ってきた数枚の写真を一人一枚手に取り、その後ろに書かれている写真の情報を友達に伝えあう。（カテウラ地区・ニャンドゥティ・ゴマ・職業訓練校・スーパー・日本語学校）でひとり一枚分用意。



この写真は…

- ・パラグアイの伝統工芸品「ニャンドゥティ」。
- ・グアラニー語（パラグアイの先住民族の言葉）で「クモの巣」を意味している。
- ・カラフルな色合いで、とても繊細。
- ・職人による手作り。
- ・写真のニャンドゥティだと、1枚100～200円で売られている。

＜フォトランゲージ 左…表 右…裏＞

- ・まずは表の写真だけをみんなで共有し予想する。
- その後担当の写真の裏側を読み、仲間に説明するように共有する。

③ 先生が見てきたパラグアイ

- ・パラグアイの基本情報をパワーポイント・実物資料（パラグアイBOX）で紹介する。

「あっちのオレンジジュースは砂糖をたっくん入れるんだよ！」「TOKYO っていう看板がたくさん！」「チパおいしかった！」「パラグアイの子どもたち、しおり喜んでたぞ～！」

- ④ パラグアイの格差ってどうして生まれるの？(KJ法)
 - ・首都アスンシオンの高層ビルが立ち並ぶ町の一角に、バラックでできた最貧困地区が移る写真を提示し、どうして国内でこのような格差が生まれるのかを考える。
- ⑤ 格差のない社会を作るためには必要なことってなんだろう？



<子どもに提示した写真>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ パラグアイで自身が撮ってきた写真を体験談も踏まえて伝えたため、子どもは楽しそうに現在のパラグアイと出会えることができた。また、以前、10年前のパラグアイについて学んだことを生かし、「都会になってる！」「ビルが多い！」「ここはあまり変わってない」などの比較をすることができた。
- ◇ 子どもたちが作ったしおりやアルバムを笑顔で受け取るパラグアイの子どもたちの写真を見せると、喜びの歓声が上がった。子どもが世界とつながれた場面であった。
- ◇ パラグアイ国内の格差がわかる写真を提示し、格差の原因や解決方法を考えさせた。これまでの学びを生かし、様々な観点から考えを深めることができるようになってきたと思う。多くの意見を出すことができ、子どもの中である程度の「知識」が増え始めた。この実践の大きな柱である「自分にできること」を考える導入としては十分の内容となった。ここから子どもたちに「考えがあっても行動に移すことは難しい」という思いを感じられるような実践につなげていく。

格差をなくすためには・・・

- 「貧しい人にお金を寄付する」
- 「ボランティアをする」「お金を考えて使う」
- 「貧しい地区があることを知ってもらう」
- 「すべての人に職業を」「みんな平等に！」
- 「技術者を呼ぶ！」「差別をしない」・・・など。



18-23 時限目「貿易ゲームをしよう！世界で一番遠い距離って??」

この時限のねらい

- ・世界の経済の動きを体感し、各国の人々の気持ちを類似体験する。
- ・協力隊の方々の話を聞き、自分にできることは何か・行動に移すことの難しさと大切さを知ることができる。

1 子どもの活動の流れ

- ① 5～6人でグループをつくり、A国(先進国) B国(中進国) C国(発展途上国)にわかれる。
 - A国・・・技術力(はさみ・コンパス・色鉛筆)が豊富。原材料(紙)が不足している状況。(1グループ)
 - B国・・・一部の技術がそろっていないが、原材料はA国より多い。(1グループ)
 - C国・・・たくさん原材料をもっているが、高い技術をもっていない。(4グループ)
- ② ゲームの説明を聞き、合言葉「世の中お金だ！」の通り、他の国より多くお金を稼ぐことが目的であることを伝える。

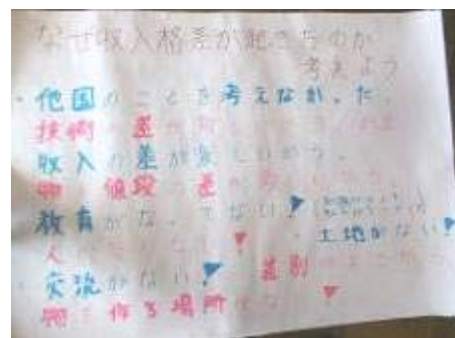
- ③ 各グループに配られた封筒にある説明書・技術力・原材料を確認し、チームで作戦会議をおこなう。
- ④ ゲーム開始。子どもたちは一斉に動き回る。
- ⑤ ゲーム終了 収支報告書に記入し、振り返る。
- ⑥ 「格差」に気づき、どのような気持ちがこのような格差を生んだのかを考える。【ワークショップ】
前時に書いた「格差をなくすためには」を見て、自分ができたこと、できなかったことに印をつける。
- ⑧ どんな気持ちが格差是正を邪魔したのかを考えよう。
- ⑦ 「世界で一番遠い距離」の話をし、協力隊の方々のビデオレターを見る。



<A国に交渉するグループ>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 開始当初、A国の周りには多くの国が物資の交換を求めに行っていた。しかし、A国にはまだ原材料があるため、ほとんどの取引を断ってしまう。はさみがないことには作業ができないため、C国の国民は色塗りなど、やれることをやってA国との交渉を待つ。
- ◇ A国に資源がなくなり、技術力が取引によって動くようになった。(5分で100円！)(5分で200円でどう?)→(そんなに払えないでしょ！帰ってきなさい！！)など、子どもたちの中でもそれぞれの役割が出てきた。
- ◇ 収支報告書から、なぜ格差が生まれたのかを考えた。前時に「格差をなくすために」を考えが、なぜこのような格差が生まれたのかを考えるため、貿易ゲームでできたこと・できなかったことに印をつけて共有をした。口で言うことは簡単だが、いざお金のお金がかかることとなると、自分の利益ばかり考えてしまうというジレンマを感じさせることができた。
- ◇ どんな気持ちが格差是正を邪魔したのかを考える活動を行った。「自分の都合のいいように活動してしまった」「お金稼ぎに集中していた。」などの意見が出て、思いと行動が繋がることの難しさを痛感していた。
- ◇ 「世界で一番遠い距離」とは、国際飢餓対策機構の講師の方が話して見えた言葉である。「頭から指先までの距離は世界で一番遠い。考えても、いざ活動するまでが長い。」という話をし、その距離を縮めることが世界をよりよくする第一歩であると伝えた。
- ◇ パラグアイで活躍されている協力隊のビデオメッセージを聞いた子どもたちからは、「見る・知ることが大切！」「協力隊の方々ってかっこいい」「目標に向かってがんばりたいと思った。」などの感想があり、その行動力に心を動かされた児童も多くいた。そのため、次単元の活動に進むことができた。



<なぜ格差が起きたのか考えよう>

24-30 時限目「パラグアイ Project」

この時限のねらい

- ・学びを自分たちが考えた方法で伝えることができる。
- ・これまでの学びを振り返り、自身の成長を自覚する。
- ・下級生に学びや思いを伝えることができる。

1 子どもの活動の流れ

- ① パラグアイについて学んだことを伝えるための資料を作成する。
- ② パラグアイで活躍されている方へメッセージを送る。
- ③ これまで1年間の活動を振り返り、どのような力がついたかを考え、下級生に伝える。

2 子どもの活動の成果・反応

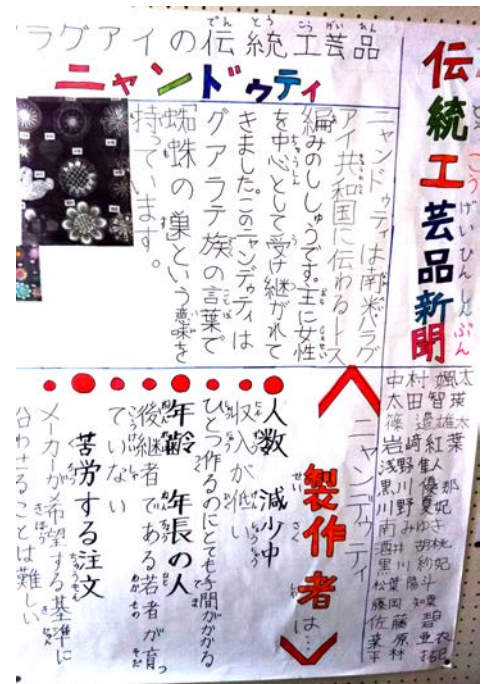
- ◇ 子どもたちは、「世界で一番遠い距離」を実際に縮め、世界で活躍している協力隊の方々へ学びを伝える活動に取り組んだ。校内の作品展を利用し、パラグアイについて学んだことや、協力隊の活躍についての掲示を作成したり、協力隊の方々へのメッセージボードを作成し、多くの方に記入してもらえるようお願いして、少しでも多くのメッセージを集めていた。
- ◇ DVD グループは、協力隊の方々からのビデオメッセージを聞いて学んだことや応援をムービーで撮影して、学びへの感謝を伝えようと活動している。このDVDをJICAのパラグアイ支部に送る計画である。
- ◇ 国際理解だけでなく、キャリア教育と2本立てで進めてきた総合的な学習の時間の振り返りとして、これまでの学びから得たこと・力・思いを共有し、それらを来年度最高学年として学校を支える5年生へ伝える活動を行う。

■ 全体を通して

1 授業の様子



<パラグアイ Project メッセージボード作成>



<作品展でパラグアイ新聞の掲示>